

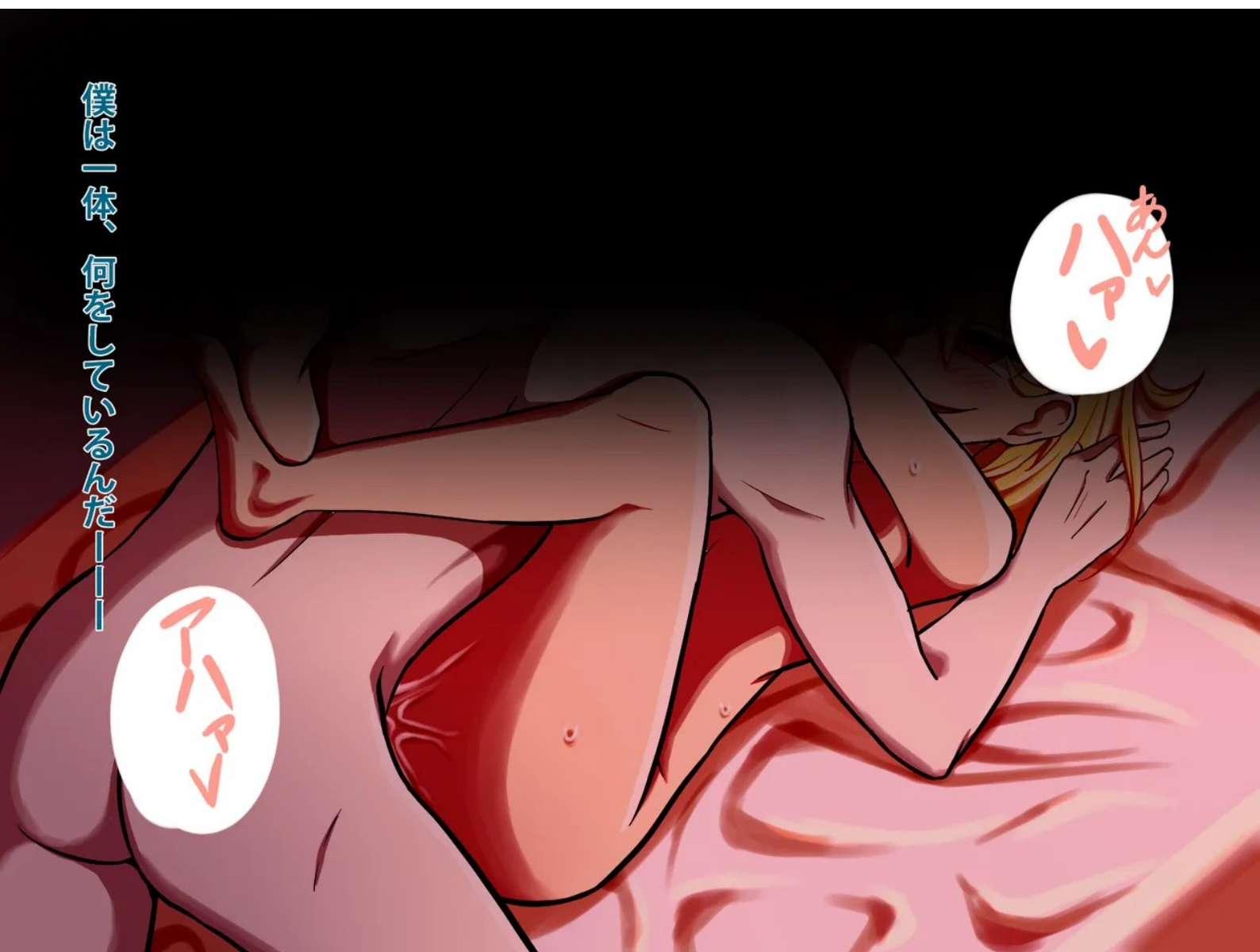


僕のカノジョの
素敵なトモダチ

「思い出に残るような
初めてにしてあげるね♡」

【逆寝取られCG集】

基本CG 12枚 本編 122ページ



僕は一体、何をしているんだー！

「あん♥激しい……♥」

彼女はわざとらしく耳元で喘いでいる。

「よかったの？今日は美奈子と勉強するって
言ってなかったっけ？」

「断ったよ……」

大村さんが僕をツ……呼び出したんじゃないか」

「あたしのせい？ひどーい♥」



「美奈子どう思うかな？
自分のカレシが自分の親友と
毎日セックスしてるって知ったら……」

「それは……ッ」

改めて自分が最低なことをしてるという
現実を突き付けられ、罪悪感が胸を刺す。

「泣くかなあ？怒るかなあ？ごめんね美奈子。

……でも仕方ないよね。

こんなに気持ちいいんだもん」

……そつだ。仕方ないんだ。

快楽を求めるのは、生き物として当然のことなんだ。
そう自分に言い聞かせ、良心の呵責から逃れる。



「あっ♡今ビクッてした……♡
もうイキそうなんでしょ?♡」

「……ッ」

ハァッ
ハァッ

「いいよお…あたしもイキそ……♡
また中に出しちゃえ♡」

天国へといざなう悪魔の囁き。
そう分かっていても僕に抗う術などない。

「大村さん……僕もう……ッ!」

「うん……♡じゃあいつものアレ……
分かってるよね?」

また「言わせる」つもりだ。どうやら彼女の中では
この台詞が絶頂の合図らしい。

パッ
パッ

パッ
パッ



「……真帆、愛してる！美奈子よりも……ッ！」

「……ッ！……ッ！……ッ！……ッ！」

ペニス全体を甘く締め付けるような動き。

同時に僕も絶頂を迎え、真帆の膣内に精を解き放つ。

「う……あッ……！♡」

精の一滴も残すまいと膣内は蠕動し、根本まで押し込んだペニスを脈動させた。



「すっご…♡まだ出てる♡」

絶頂を迎えてもなお、股間の怒張は収まらず
真帆の中に精を吐き出し続けている。

「ね？まだできるよね？」

「……………」

僕は彼女の囁きに対し、無言で頷くのであった。



「……雄二？ 話、聞いてる？」

「え……ああ、ごめん。ぼーっとしてた」

「もー、しっかりしてよね」



美奈子に肩をゆすられ、ふと我に戻る。

美奈子は幼稚園からの幼馴染で、僕の彼女だ。

幼い頃からひそかに好意を寄せていたが、去年の冬に僕から告白し、めでたくお付き合いすることになった。

恋人同士になってからは、こうして屋上で昼食をとることが日課になっている。

「来週の中間テスト。ちゃんと勉強してるの？」

「……うん。してるよ」

「ウソ。全然してないでしょ」

さすがは幼馴染。どうやらお見通しのようだ。

「今回のテスト範囲、結構広いんだよ？」

「しっかり勉強しとかないと痛い目見るんだから」

「相変わらず美奈子は優等生だなあ。」

「とりあえず赤点さえ取らなければ問題ないでしょ？」

「でも……」



「雄二には今の内から頑張ってほしいの。
大学も一緒のとて行きたいし……」

美奈子は僕と違って成績優秀だ。

美奈子と同じ大学に進むには、

僕もそれ相応の努力をしなくてはならない。

美奈子は僕以上にそれを心配してくれているのだ。



「美奈子……」

うん、わかった。ちゃんと勉強するよ」

「雄二……」

僕の返答に、美奈子の表情がハアツと明るくなる。

「じゃあさ、今週の土曜一緒に勉強しない？
ちょうどウチ空いてるし」

「え、いいの？」

「うん！ そしたら分らないところも
教えてあげられるでしょ？」

「ありがとう！ すごく助かるよ！」

僕がそう言うのとほぼ同時に、
屋上の入り口が開く音がした。

「あれ？ 美奈子じゃん」



「やつほ。ここで何してたの？」

「あ、真帆ちゃん。」

姿を現したのは、美奈子とは正反対の
派手な風貌の女子だった。

「いまお昼ご飯食べてたところだったの」

「えー！ 最近付き合い悪いと思ったら
こんなところで食べてたの？」

「えっと、うん。彼氏と……」

「初めまして。佐々木雄二です」



「あ、君がユージ君？
よろしくね」
あたし大村真帆。

「あ、うん。よろしくね」

ギャルっぽい見た目から少し警戒したが、
意外と気さくな性格のようだ。

「美奈子。あんたもやるわね」

「？ どういうこと？」



「人気のない屋上でエロいこと
してたんでしょ? やらし」

「!? そんなことしてないよ!」

「本当? 怪しいなあ」

「ほ、本当だよ大村さん。
いま、中間テストに向けて
一緒に勉強しようって話をしてたんだ」



「う！　そういえばテスト来週だった！
全然勉強してない……」

「そういえば真帆ちゃん、次赤点取ったら
夏休み返上で補修って言ってたっけ」

「そっなんだよ！　こんなクソ暑い中で
勉強とか絶ツツツ対イヤ！」

「うーん……　それなら、真帆ちゃんも
私たちと一緒に勉強する？」

「え？　いいの!？」



「いいかな、雄二？」

「もちろん。僕は構わないよ」

正直言うと、美奈子と二人っきりじゃないのは
少々残念である。

「救世主〜！ 持つべきものは親友だね♪」

「大袈裟だなあ。じゃあ土曜日、私の家でね」
「おっけ！ よろしくね〜」



土曜日



土曜日。僕は勉強をするべく美奈子の家に来ていた。

「美奈子。この解き方わかんない」

「そこはこの公式を使って……」

さつきから美奈子は大村さんの家庭教師状態だ。
僕も教えて欲しいのに……



「……っていう風に考えれば
わかりやすいでしょ？」

「なーる！ さすが美奈子センス」

どうやら大村さんは順調のようだ。
僕も気合を入れなくてはならないのだが、
どうしても集中できない事情が一点ある。



ずばり、大村さんの胸である。

胸元の露出が多く、正面に座っていると嫌でも胸の谷間が目に入ってきて来てしまう。

しかも机に乗っかるほどの大きさ。

同学年でもここまで大きい人はいないだろう。





別に大きい胸が好きという訳ではない。
しかし健全な青少年としては、これほどのものを
目の前に突き付けられて無関心でいると言う方が
無理な話である。

しかも彼女の家で、彼女の友達の胸を
盗み見ているという状況に、
僕はなんとも言えないスリルを感じていた。



しまった……！　じろじろ見過ぎてしまった。
胸を見てたこと、気づかれてないよな……？

「!？」

「……………」

「でさー、こっちの問題も同じ考え方でいいの？」

「ううん、そっちの問題は……」

よかった……気付いてないみたいだ。
たまたま目が合ったただけだったのかな。





「てかさー、今日クソ暑くない？」

「……!？」

「暑いねえ。エアコンの温度
もうちょっと下げようか」

「おねがい」

こ、これは……

グ
イ

暑いと不満を漏らしながら、
大村さんは胸元を大胆にはだけさせた。

胸元には、彼女の発言を裏付けるように
一筋の汗が流れていた。



特に目を引いたのは、派手な装飾の
紫色のブラジャーだった。

普通、高校生が身に着けるような代物ではない。

パタパタとはためくシャツから見え隠れする
大村さんの胸元に、僕は釘付けになっていた。



「……ふっ！」

唐突に、大村さんは吹き出すように笑った。

「? どうしたの？」

「ごめん、思い出し笑い」

まさかバレていたのか、初めから……??
僕の視線に気づいていたしながら
泳がせて反応を楽しんでいたのか?



「……!?!」

ふいに、股間に刺激を感じた。
目をやると、大村さんのものと思われる足が
僕の股間をまさぐっている。

「それでここがこうなって……」

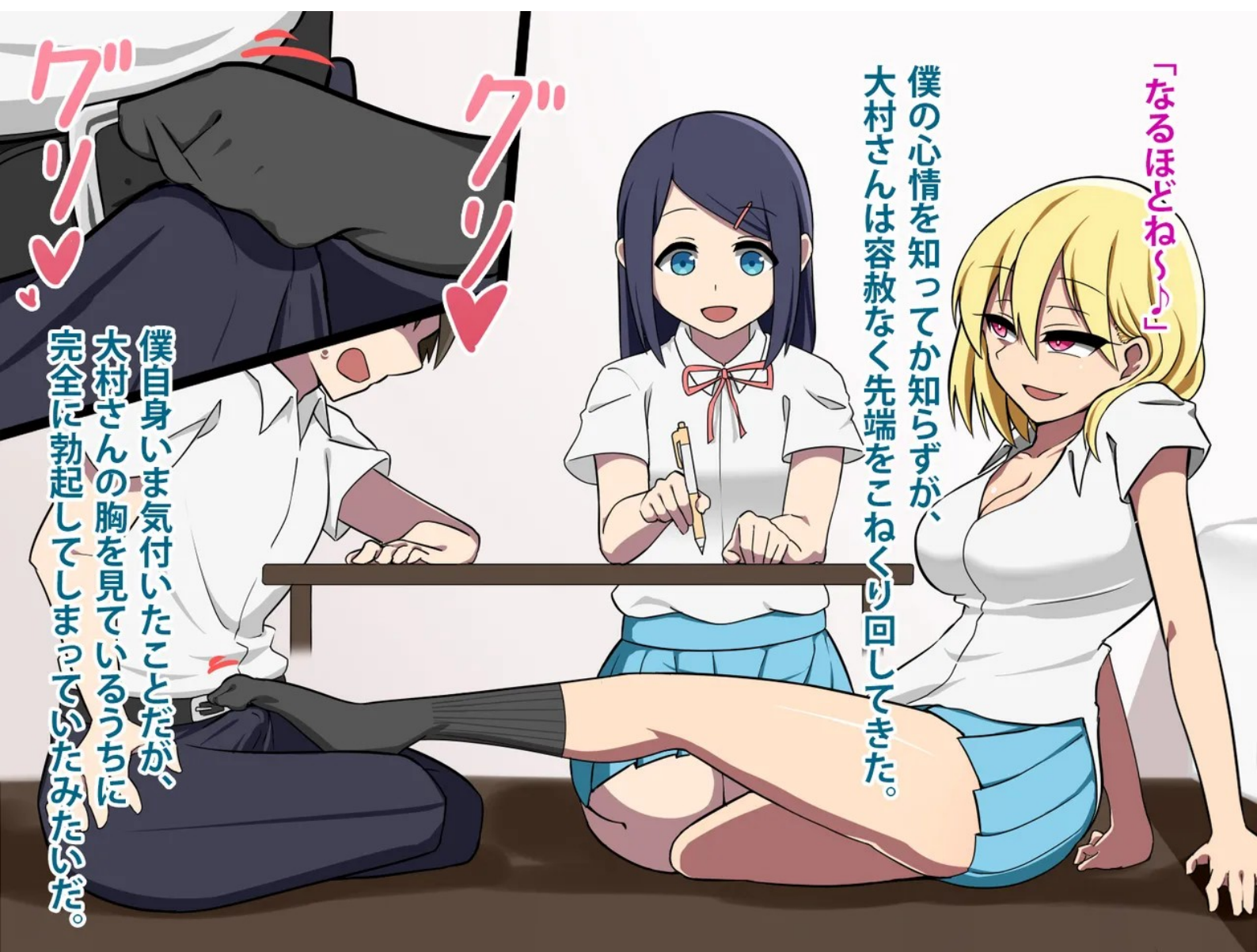
どうやら美奈子は気付いてないようだ。
大村さんの悪ふざけが済むまで
どうにか勘づかれないようにしないと……



「なるほどね〜♪」

僕の心情を知ってか知らずが、
大村さんは容赦なく先端をこねくり回してきた。

僕自身いま気付いたことだが、
大村さんの胸を見ているうちに
完全に勃起してしまっていたみたいだ。

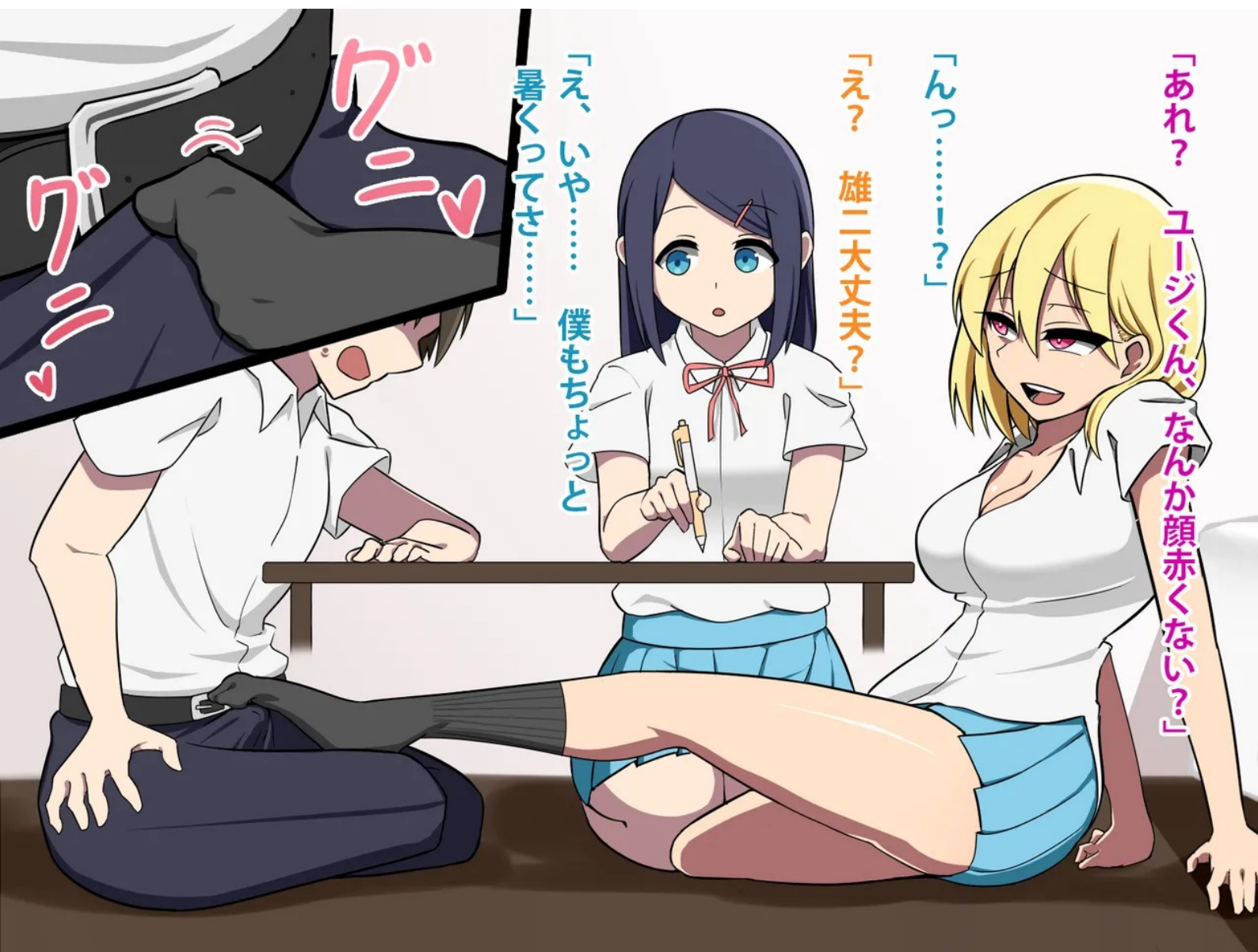




乱暴な責めから解放されたかと思えば、
今度はつま先で裏筋をなぞるように触れてきた。

根元から先端に擦られるたびに
股間に血液が集まっていくのが分かる。

ビク
ビク



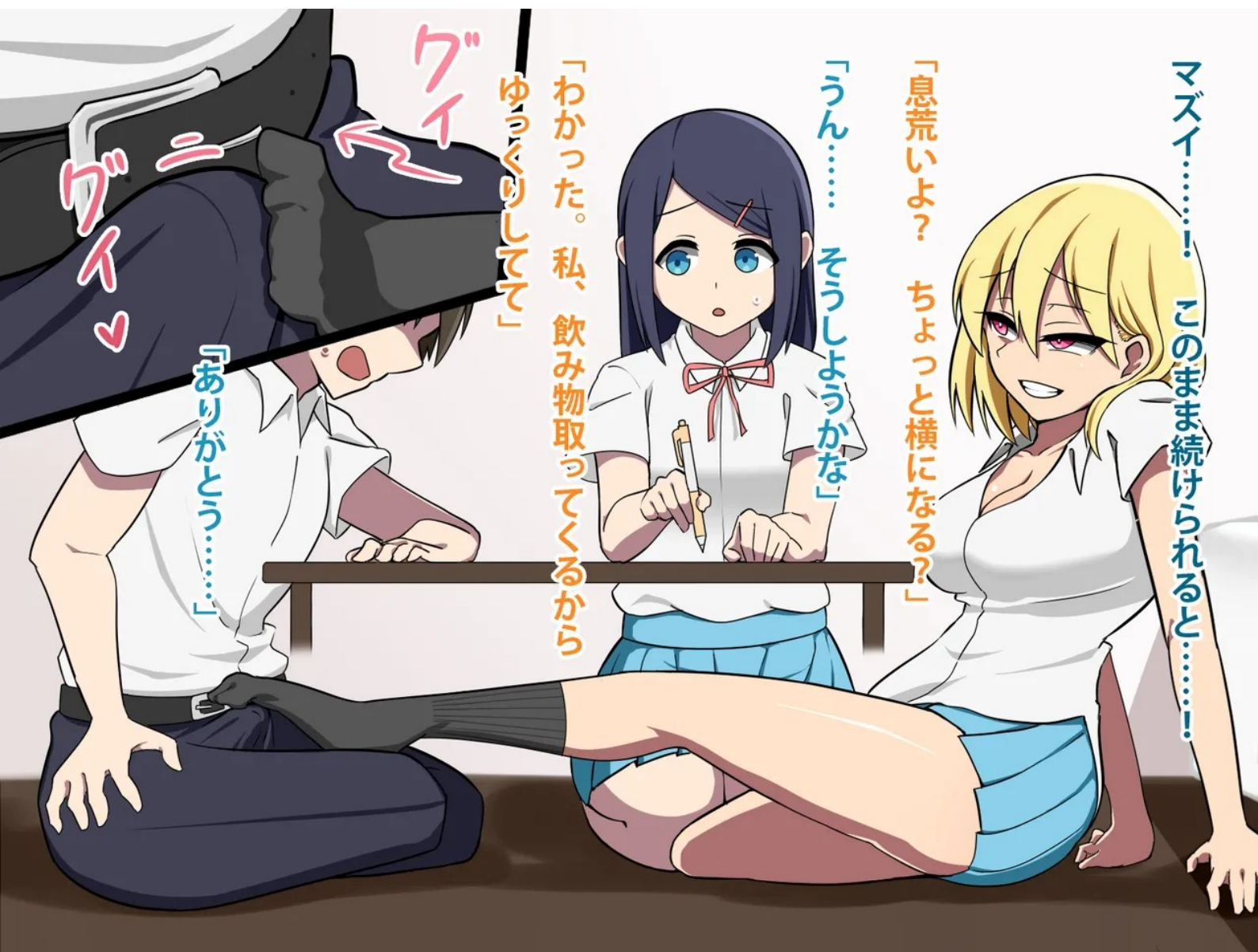
「あれ？ ユージくん、なんか顔赤くない？」

「んっ……！？」

「え？ 雄二大丈夫？」

「え、いや…… 僕もちよつと暑くつてさ……」

グニ♡
グニ♡



そういうと、美奈子は部屋を出て行った。

「大村さん……」

ふざけるのはいいかげんに……!!」

「ごめーん♪ ユージさんの反応
おもしろくってさあ」

「もう十分でしょ…… だから……」

「えー? でもお……」



「コレ、どーすんの？」

僕の方に寄ってきた大村さんが、
すっかり怒張したペニスを
さすりながら尋ねる。

「こんな状態じゃ
勉強どころじゃないでしょ」

「それは大村さんが変な触り方するから……」

「だからごめんって。一発又いてあげるからやあ」

サ
ワ
ッ
ク



そういうと、大村さんは手慣れた手つきで
ズボンのチャックを下ろし、僕のペニスを取り出した。

「ちよっ………なにして……!?!」

「大丈夫大丈夫♪
あたしフェラちょー上手いからさあ。
ユージ君もすぐイかせたげる♡」

僕に見せつけるように舌をべろっと出して
大村さんは微笑んだ。



「ん……♡」

僕の返事を待たずして、大村さんは
ペニスの裏筋に舌を這わせた。

「うあ……!?!」

突然の刺激に思わず腰を浮かせてしまった。
経験したことのない刺激に頭が混乱する。

「あはっ♡ 今ビクッてした」

レロォ……♡



大村さんはニタニタ笑いながら
僕の反応を伺っている。

「もしかして、どうなの初めて？」

「初めてに決まってるだろ……！」

「まあそうだよーね！。じゃ、思い出に残るように
すっごいよくしたげる♡」



そう言っと、大村さんは僕のペニスを咥えこんだ。
そしてゆっくりと頭を前後させ、味わうように
先端に吸いつく。

「大村さん……やめてくれ……!」

ちゅっ
いっ
っ

「んー?」

僕の声が聞こえているはずなのに、
わざとらしくとほけてフェラを止めようとしな
い。
どうやら、大村さんは本気で僕を
イカせるつもりようだ。

「ほお？ ひもひら？」

「うあ……！ それヤバ……！」

千口♡
千口♡

舌を亀頭に這わせるように責められ、
反射的にふとももを震わせてしまった。

大村さんは僕の反応に満足したかのように
目を細めた。

すると、大村さんは頭を上下に激しく振り始めた。

「大村さん…… もう僕……ッ！」

先ほどの足責めで既に限界寸前だった。

グポグポと音を鳴らす彼女に見つめられながら
腹の奥から熱いものがこみ上げてくるのを感じる。



「……」

「！」



そう感じた瞬間にはもう抑えられなかった。

勢いよく放たれた精が大村さんの口から溢れだし、彼女の手をつたい落ちる。



ドクッ

ドク

ヤバイ…… 頭がクラクラしてきた。
オナニーがお遊びに思えるほど気持ちいい。
僕には彼女がいて、大村さんは美奈子の
友達なのに……

そんな罪悪感を感じながらも、
僕は腰を震わせながら大村さんの口に精を放つ。

彼女はペニスを咥えながらずっと僕を見つめている。
まるで僕の心を見透かしているかのような瞳だ。



「すっごお……♡ めっちゃ出すじゃん♡」

ようやく口を離したと思ったら、
口の中に残った精液を僕に見せつけてきた。

「ね？ あたし上手いでしょ？」

こんなの経験したら美奈子のじゃ
満足できなくなっちゃうかもね……♡」

美奈子の名前を出され、ふと我に返る。
そっだ、僕はなんということ……

ドロォ……



「ん……♡」

口を閉じた大村さんがごくりと喉を鳴らす。

ゴクン♡

まさか…… え？

いや、そんなことをするのは

AVとかの演出上だけの話だろう？

いくらなんでもそれは……

「あは、飲んじやった♡」

そう言っつて大村さんは
何もなくなった口内を僕に見せつけた。

ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ

その光景を見て、胸の奥がざわつくような感じがした。
精と一緒に僕のプライドや尊厳まで
飲み干されたような気分だ。

余韻に浸っていると、美奈子のものと思われる
足音が部屋に近づいてくる気配がした。



ガチャッ

「雄二、麦茶持ってきたよ」

「あ、ありがとう……」

扉が開く直前に机に向き直し、事なきを得た。



大村さんの方に目をやると、何事もなかったかのように机の向かい側に移動していた。

その光景を見ていると、さっきまでの行為がまるで夢だったかのように感じる。

「ゴクツ、ゴクツ……」

美奈子が持ってきてくれた麦茶を飲んで
気持ちを落ち着かせる。

「気分、どう？」

「うん、何ともないよ」



「雄二、昔からよく体調崩すもんね。
キツイときは無理せず言ってね」

美奈子はそう言っつて、僕の背中を優しくなでる。

……僕はなんてことをしてしまったんだ。

美奈子の優しさに触れ、改めて自分のしたこと
の罪深さを思い知る。

大村さんから迫ってきたからと言っても、
その気になれば彼女を押しつけることも
できたはずだ。

それなのに僕は快感に流されて
美奈子を裏切るようなことを……

そう考えると、嫌な汗が止まらなくなった。

「……雄二？」



「……え？」

「すごい汗だよ？
本当に大丈夫……？」

「……ごめん美奈子。

やっぱり気分悪いから今日は帰るね」

「あ、じゃあ私家まで送るよ」

着いて来ようとする美奈子を振り払うように
僕は黙って部屋をあとにした。



帰宅後……



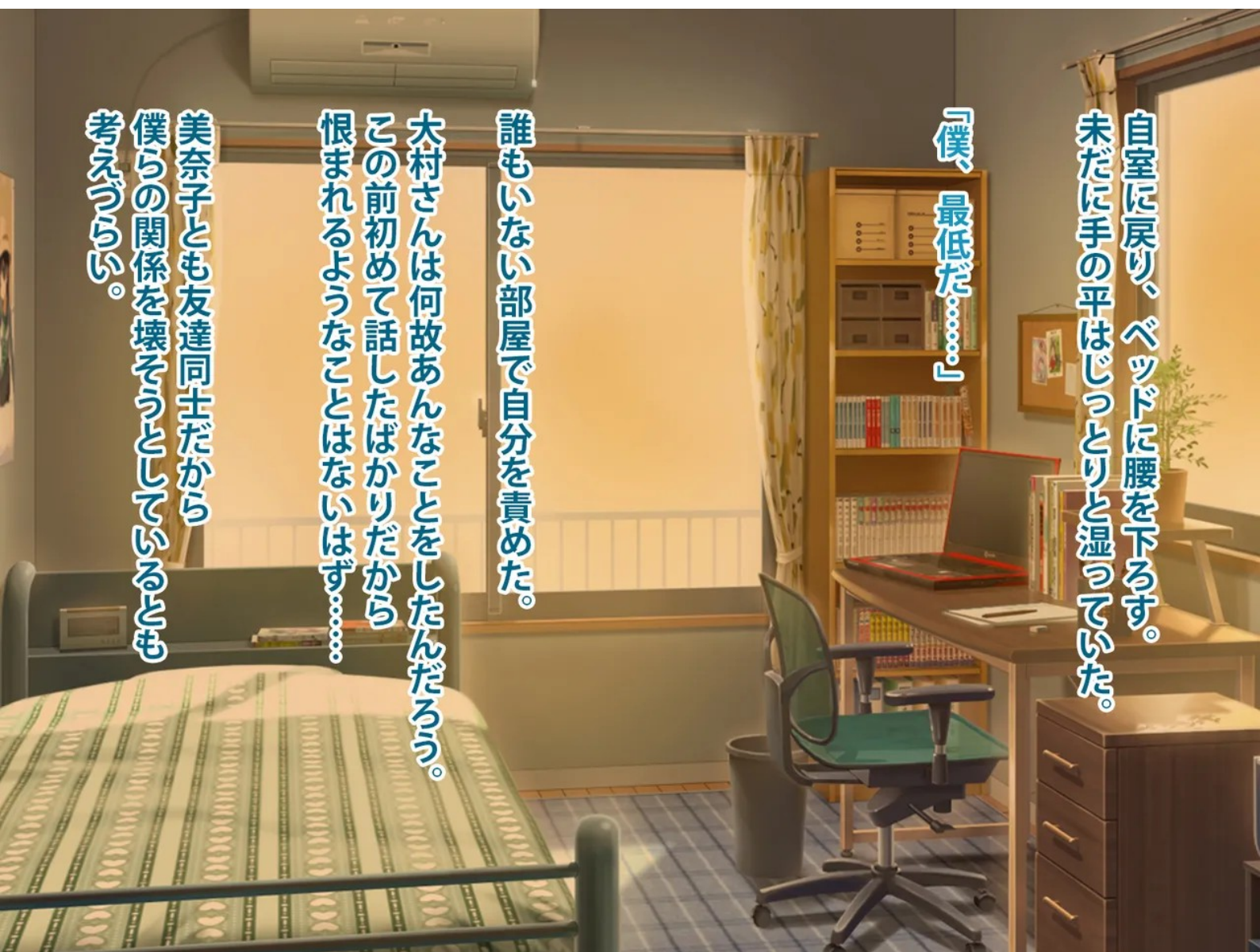
自室に戻り、ベッドに腰を下ろす。
未だに手の平はじっとりと湿っていた。

「僕、最低だ……」

誰もいない部屋で自分を責めた。

大村さんは何故あんなことをしたんだろう。
この前初めて話したばかりだから
恨まれるようなことはないはず……

美奈子とも友達同士だから
僕らの関係を壊そうとしているとも
考えづらい。



だったら、本当にただの気まぐれ……？

どちらのせよ、美奈子にバレていないのが
唯一の救いだ。

……今日のことは墓場まで持っていこう。
また大村さんに迫られたとしても
今度はきっぱり撥ね付ければいいんだ。

もう二度と、今日のようなことが
起きないようにしよう。

『ピロン♪』

僕が決意を新たにしていると、
スマホにメールが届いた。

美奈子からの連絡かと思い、メールを開く。

いざわん



!?

写真に写っているのは
紛れもなく僕と大村さんだ。

しかも大村さんが僕のペニスを
咥えんとしている瞬間の。

僕が気づかないうちに
スマホで隠し撮りされていたようだ。



先ほどの決意が
音を立てて崩れていくのを感じる。

大村さんはどういう意図でこの写真を撮り、
そして僕に送りつけてきたのだろう。

真意をはかりかねていると、
僕に追い打ちをかけるかのように
メールの通知が鳴る。



こちらの心情を知ってか知らずか、
まるで記念撮影の写真を
送ってきたかのようなノリで
メールが送られてくる。



もちろんそんなやり取りに
付き合う気にはなれず、単刀直入に
大村さんに真意を確かめることにした。

返信はすぐに来た。

続けて住所情報が送られてきている。
ここに来いということだろうか？



とにかく居ても立ってももられず、
僕は指定された場所に向かうことにした。

走って約10分。
指定された場所近辺にやってきた。

どうやら住宅街のようだが、
大村さんはどこにいるのだろうか。

「あ、きたきた」



「早かったね〜
もしかして走ってきた？」

正面の家から大村さんが出てきた。
どうやら指定されたのは
大村さんの家だったようだ。

「……それで、
話ってなにかな？」



「まあまあ。

とりあえずウチ上がってよ。
誰もいないからさ」

「……わかった」

先ほどのことがあったため身構えたが、
襲われそうになったら押しのけてでも
帰ればいいだけだ。

覚悟を決め、大村さんの家の中に入る。



階段を昇り、大村さんの部屋へと通される。

美奈子の部屋と異なり、飾り気のない
シンプルな部屋だった。

以外にも、本棚には多くの本が並べられている。

「ぞ、座って座って」

僕を椅子に座るように促し、
大村さんは自分のベッドに腰かけた。



「大村さん、あの写真なんだけど」

「心配しなくても、美奈子にはバレてないよ」

その言葉に、ひとまず安心する。

「脅すわけじゃないけどさあ。
この写真消してほしかったら
ひとつお願い聞いてほしいんだよね」

脅しじゃないか……



「……内容は？」

「うん。それはあ」

大村さんはベッドから立ち上がり、
僕の方へ近づいてくる。



「あたしとセフレになってくれない？」

彼女は僕の膝上に跨り、
真っ直ぐと僕を見据えてそう言った。

「は… え？ セフ……？」

突拍子もない行動と提案に、
軽くパニックになってしまった。

ギョッ



「あれ？ セフレってわかんない？
要は… エッチするだけの友達みたいな？」

「いや、それは分かるけど…
なんで僕なの……？」

大村さんならいくらでも
相手してくれる男はいるでしょ？
という言葉は飲み込んだ。

「前から君に興味あったんだよね！。
美奈子からいつも惚気話聞いてたからさ。
……わかるでしょ？」



「人のものって、すっごい
美味しそうに見えるんだよね……
だから味見させてほしいの」♡

そう言いながら、彼女は顔を近づけた。
美奈子とだってこんなに密着したことはない。
大村さんの息遣いを肌で感じ、ぞくりとする。

ぐいっ♡

「大村さん……それだけはダメだ。
もう美奈子を裏切る真似はできない」

「……言ったでしょ？
人のものだから意味があるの」



「ん……!？」

すんでのところで触れ合っていなかった唇が
ゆっくりと重ねられる。

…柔らかい。経験したことのない
柔らかさと甘い香りで僕の思考は支配された。

チュッ♡

「…んふ♡」

僕が抵抗しないことに気をよくしたのか、
大村さんは嬉しそうに笑う。



「ふ… んちゅ…♡」

貪るように、
執拗にキスをされ続ける。

二人の唾液が混ざりあい
聞こえる水音が、なんとも
いやらしく聞こえる。

それまで停止していた思考が徐々に戻ってきた。
抵抗しようと身じろぎしたが、この体勢では
うまく力が入らない。





僕の抵抗に感づいたのか、
大村さんの腕に力が入り
さらに身体を密着させられる。

「んう…♡」

吐息を吐きながら、僕の舌に
自分の舌を絡ませてきた。



さっきよりも強い刺激に、
再び僕の理性は陰りを見せてしまう。

「んはあ… どう？

美奈子とじゃこんなキスしたことないでしょ？」

「そんなこと……

美奈子とはキスだってしたことないんだ」



そういうと、大村さんが少し動揺したように言った。

「え…？ キスもまだだったの？
じゃああたしがユージ君のファーストキス？」

「……そう、なるね」

「そっかあ… てっきりそれぐらいは
済ませてるものだ……」

大村さんは少しバツが悪そうにしている。
ここまでしておいて何を今さらとは思うが、
なにか彼女の中での線引きがあるのだろう。

「じゃあ……」





「思い出に残るような
初めてにしてあげるね♡」

そういうと、再びキスをし
舌を絡めてきた。

「れろ…ん……♡」

先ほどの押さえつけるようなキスとは異なり、
今度は優しく舌を撫でまわすようなキスだった。

「はあ… ど？ 気持ちいいでしょ？」

正直、頭がとろけそうになった。
甘い匂いと感触で眩暈がするほど
頭がクラクラする。

「あは……♡
顔、とろけちゃってるよ？」



「ねえユージ君。
美奈子と勉強してるときさ、
あたしの胸ガン見してたよね？」

ガン見してたつもりはないが、
本人にはそう映っていたようだ。

「気になるなら、近くで見せてあげようか？」



僕の返事を待たずして、彼女は上体を起こし
シャツのボタンを外し始めた。

「どうユージ君？
堂々とあたしのおっぱい見れる感想は？」

幼げのある顔や言動とは対照的に、
その身体は同級生ものとは
思えないほど妖艶だった。

フェル

あまりにも現実離れした光景に、
思わず生唾を飲み込む。

「あはは！ ユージ君見すぎー♡」



「ユージ君おっぱい好きなんだー？
じゃあ美奈子のじゃ満足できないかもね？」

「別に…… 美奈子をそういう目で
見てるわけじゃないから」

美奈子の名前を出され、少しムツとする。



「えー？ それはそれで可愛いぞーだよー」

そっいいながら、大村さんは
ブラのホックを外し始めた。

「じゃーん。ユージ君
お待ちかねのおっぱいだよ♪」

大村さんがその豊満な乳房を露わにする。
瑞々しくハリのあるその乳房は、
見ただけで柔らかいと確信できるほどだった。

「アハッ！ ユージ君見すぎでしょw
ねー？ 触りたい？♥」

「いや… 僕は……」



『ずべこべ言わず触りなよ。ホラッ!』

大村さんに腕をつかまれ、無理矢理胸を触らされる。押し当てられた僕の指は彼女の乳房に沈み込んだ。それは、想像を遥かに超える柔らかさと弾力だった。

『柔らかいっしょ? あたしのおっぱい結構評判いいんだよ?』

確かに、状況が状況でなければ何時間でも触っていたいと思えるような感触だった。



「ん♡ 触るの上手だね。
気持ちよくなつてきちゃった…♡」

彼女が勝手に僕の手を押し当ててるだけなのに
あたかも僕が愛撫しているかのような台詞。

なのに、不思議と自分が彼女を感じさせて
いるのではないかという錯覚に陥る。



「ああん♡ そんなにされたら
ユージ君のこと好きになっちゃうかも…♡」

演技臭い台詞ではあったが、好きという言葉に
不覚にもドキッとしてしまう。

「ユージ君…
ここすっごい苦しそうだよ？」

そう言いながら、空いている右手でペニスを撫でる。

自分でも気づかないうちに、僕のイチモツは
これまでにないほど怒張し、ズボンを押し上げていた。

「あたしも濡れてきちゃった…♡
ねえ、もう挿入れていいよね？」

「だ、だめ……」

最後の理性を振り絞り、大村さんを拒絶する。





「んっ…♡」

再び、キスをされた。

たちまち僕の鼻腔は
甘い匂いで満たされ、
思考に霞がかかる。



「ユージ君好き…♡
すぎだよ…?♡」

腰を。ペニスの上にくねらせながら
耳元で甘い言葉を囁かれる。

「ユージ君… いいよね…?♡」

先刻と同じ質問。同様に大村さんを拒絶すればいいだけだ。

しかし何故だろう。僕の口から拒絶の言葉は出ず、ただ荒い息が漏れるのみだった。

沈黙を了承と判断したのか、大村さんは嬉しそうに笑った。



「…じゃ、スベズらうっか?♡」

「こっち♡」

椅子から立たされ、よろよろとベッドへ歩く。

ベッドの前まで行くと、背中を押された。

決して強い力ではなかったが、

僕は容易くベッドへと倒れこんでしまった。

「これも邪魔だから脱ごつか♡」

振り返ると、大村さんはいつの間にか一糸まとわぬ姿になっていた。

大村さんは慣れた手つきで僕のベルトを外し、パンツごとズボンを一気に脱がした。

「やば… すごいことになってるよ?」

そう言われ下腹部に目をやると、すでにペニスは先走り汁でぐしょぐしょになっていた。

「そんなに興奮しちゃった?♡」

大村さんがペニスの手前あたりに腰を落とす。
僕に覆いかぶさるように上体を倒し、顔が近づく。

「口ではあんなこと言ってたけど、
こっちの方はやる気マンマンだったんだ♡
こんなにヒクヒクさせちゃって…♡」

大村さんの言葉の通り、圧迫から解放されたペニスは
刺激を求めひとりでに痙攣している。



「あたしもホラ♡
こんなに濡れちゃった…♡」

そう言うつと、大村さんは濡れそぼった秘部を
ペニスの裏筋に擦り付けるように
腰をグラインドさせる。

「うぐっ……いっ？」

「あはっ！ なにその声？
まだ挿入れてないんだよ？」

アッ♡
アッ♡

「ねえユージ君…
あたしもうがまんできない…
挿入れていいよね?♡」

媚びるような声色で尋ねてくる。
その言葉に対し、僕は了承も拒絶もせず
ただ息を荒くするのみだった。

ワチュ♡

ワチュ♡

「ユージ君……」

何も言ってくれないと分かんないよ?」

そう言つと、大村さんは腰の動きを止めた。

「挿入れて欲しかったら言つて?」

「ドコにナニを挿入れてほしいのか」

ピタッ

「ほ、僕は……」

その言葉は、僕から大村さんを
求めることを意味している。
ドロドロになった脳みそでも
それだけは言うまいと、理性が働いた。

「…めんどくさいなあ。
ホラッ！ 早く言いなよ！」

突然語気を強めた大村さんに
思わずビクッとしましまう。

「いいじゃん別に。ユージ君は
あたしに脅されてしてるだけなんだからさ。
てかここまで無抵抗だったくせに
そこだけ言い渋っても意味くない？w」

大村さんの言葉に気圧され、僕の僅かながら
残っていた理性は崩れ去ってしまう。



「……挿入れ ……たい」

「…♡ もっとちゃんと言って?」

「……大村さんの中に ……僕の子●コを」

「真・帆♡」

「……真帆の中に、僕の子●コ挿入りたい……!」

「よく言えました♡ じゃあお望み通り…
挿入れちゃうね?♡♡」



僕の言葉を聞いた大村さんは、
ペニスの先端を秘部の入口にあてがうと
一気に腰を沈めてきた。

「んああ…♡ 挿入っちゃったね？」

「うあ… あっ…!♡」

ズパッ

アハッ…♡

初めての感覚。

ペニス全体が熱い。

大村さんの体温で溶かされてしまいそうだ。

思わず、自分でも聞いたことのない
声を発してしまった。

「どう？」

「ちょーきもちいでしょ？♥」

僕に尋ねながら、大村さんは腰を前後にグラインドする。

「こーしてあげると、大概の男は大人しくなるんだよね♥」

大村さんの言葉に答える余裕もなく、僕は無様に喘ぐことしかできなかった。

ア
チ
ュ
♥
ア
チ
ュ
♥

「わかってる?♥ ユージ君
今すごいエロい顔に
なっちゃてるよ?♥♥」

そう言われ、咄嗟に顔を
手で覆い隠す。

ペロ♡

「だあめ、ちゃんと見せて?♥
その顔めっちゃ興奮する…♥
美奈子も見ただことない、あ
たしだけの表情♥」

彼女が昂ったような表情を見
せたと同時に、
腰を動かすスピードも速くなる。

アッ♡
アッ♡



「ねえ、ためしに
あたしのこと好きって言うてよ♡」

「それだけは…っ言えないよ」

「なんで？『真帆好き』って
たった四文字言っただけだよ？」

「ただの言葉に、そんな意地張る必要なくない？
ここにはあたしとユージ君しかいないんだし。
今だけはラブラブカップルになるーよ？♡♡」

僕の心を見透かしたように、大村さんは
僕の精神的な逃げ道を用意する。



「ホラ、イかせてあげるから早く早くいいなよ♡♡」

僕の思考を奪うように、
彼女は腰の動きを激しくする。

「大村さん、す…」

「ちがつでしょ?」

「…真帆、好きだ……ッ!」

「…ッ♡ うれしい♡♡♡」



「んっ……っ♡♡♡」

その言葉と同時に、
僕は大村さんの中に
大量の精を吐き出した。

「ハア…♡ あたしも軽くイッちゃった…♡」

「大村さん、ごめ…！ 僕中に…っ！」

「いーよいーよ。今日大丈夫な日だから」



「やバ、出しすぎ…♡
まだ溢れてきてんじゃん♡」

下腹部に目をやると、
逆流した精液が結合部から
ドクドクと溢れだしてきていた。

「こんな孕ませる気マンマンの中出しっついで
謝られても反応に困るんですけど♡」

「ど、ごめん……」

謝らないでよと笑いながら、
腰を浮かせ僕のペニスを引き抜く。



「アハ♡ まだ元気そうじゃん♡」

グボツと音を立てて引き抜かれたペニスは、挿入前と変わらず怒張っていた。むしろ、射精前より強張っているようにも感じる。

グボ♡♡

「ユージ君、二回戦目いけるよね?♡」

そう言うとき彼女は僕の上から降り、お尻をこちらに突き出す姿勢になった。



「ホラ♥ 今度は
ユージ君が動いてみてよ♥」

そう言いながら、
誘うように腰を左右に振る。

思考に霧がかかったような
夢のような感覚のまま、
大村さんの背後に移動した。

大村さんの秘部に目をやると、
何かを求めるように
ヒクヒクと蠢いていた。



「ユージ君の好きに動いていいよ♡」

移動したはいいが、
初めてのこと故
勝手がわからず
まごついてしまった。

「ご・こ♡
そのまま奥に挿入れて…♡」

大村さんの手に誘導され、
亀頭が秘部の入口にくっつく。

先っぽが触れているだけなのに
大村さんの熱とひくつきが
伝わってきた。

僕は堪らず、ペニスを奥へと
押し進める。



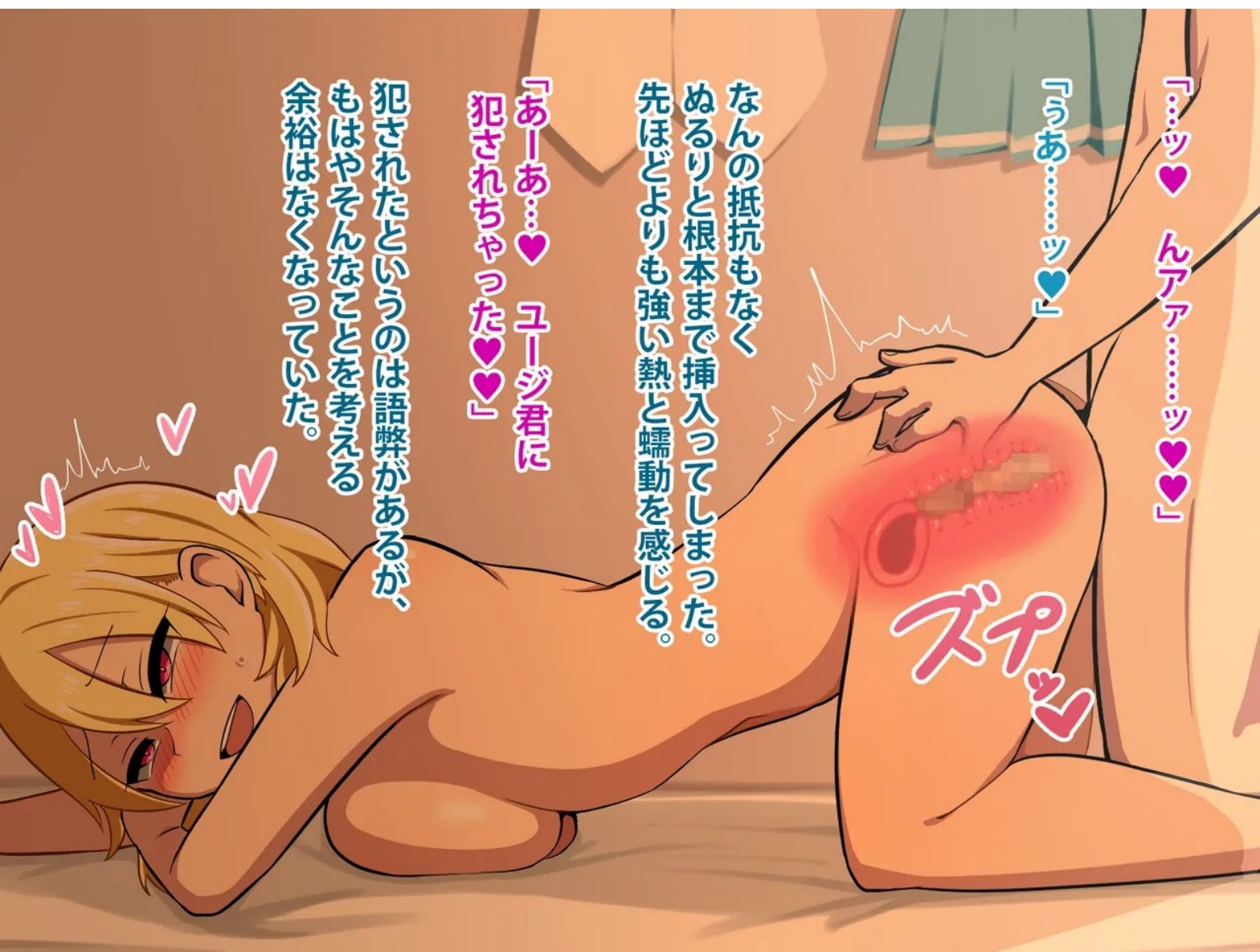
「…ッ♡んアア…ッ♡♡」

「うあ…ッ♡」

なんの抵抗もなく
ぬるりと根本まで挿入ってしまった。
先ほどよりも強い熱と蠕動を感じる。

「あーあ…♡ ユージ君に
犯されちゃった♡♡」

犯されたというのは語弊があるが、
もはやそんなことを考える
余裕はなくなっていた。



挿入れた方がいいが、
ここからどう動けば
いいのかわからない。

とりあえず前後に
動いてみるが、
空振りしてるようで
上手くいかない。

「動かし方上手♡
その調子その調子♡」

この状況では、
励まされているのか
馬鹿にされているのか
判断しかねる台詞だ。

羞恥と焦りから
さらに動きがおかしなこと
になってしまう。



「大丈夫大丈夫♡
あたしが動いて
あげるから♡」

僕の醜態を見かねたのが、
大村さんが腰を
押し付けるように
動かしてきた。

「ハア…♡
きもちいよユーヅ君♡」

しばらくはされるがままだったが
大村さんが動いているうちに
少し要領がつかめてきた。

大村さんが腰を
押し付けるのと同時に、
こちら腰を突き出してみる。



「んっ♡♡♡♡♡」

大村さんとの
タイミングが
かみ合ったのが、
しっくりくる動きが
できたように感じる。

「すご…♡ 今のすっごい
いいところに当たった…♡」

同じ要領で動かそうとしたが、
同時に膣内の締めまりが
強くなったことで
うまく腰に力が入らない。



「ほらほら♡
なに止まってんの？
もっと動いてよ♡」

そんな僕をよそに、
大村さんは腰を動かし
ピストンを促す。

動きは先ほどよりも
激しいものとなり、
パンパンと音を立てながら
腰を打ち付け合う。

「あん！♡ ヤバ♡
ユージ君すごい…♡」

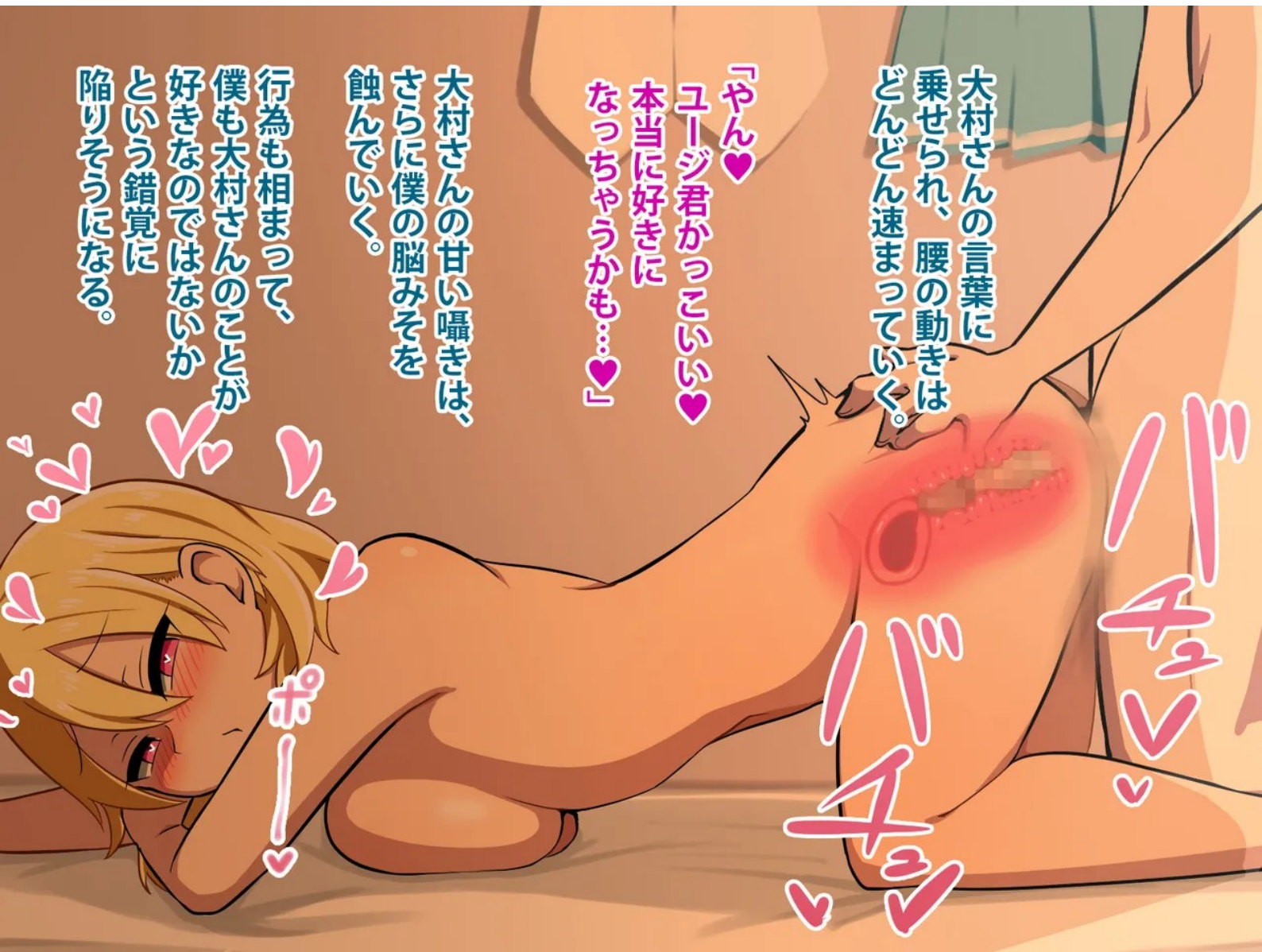


大村さんの言葉に
乗せられ、腰の動きは
どんどん速まっていく。

「やん♡
ユージ君がっこいい♡
本当に好きに
なっちゃうかも…♡」

大村さんの甘い囁きは、
さらに僕の脳みそを
蝕んでいく。

行為も相まって、
僕も大村さんのことが
好きなのではないか
という錯覚に
陥りそうになる。



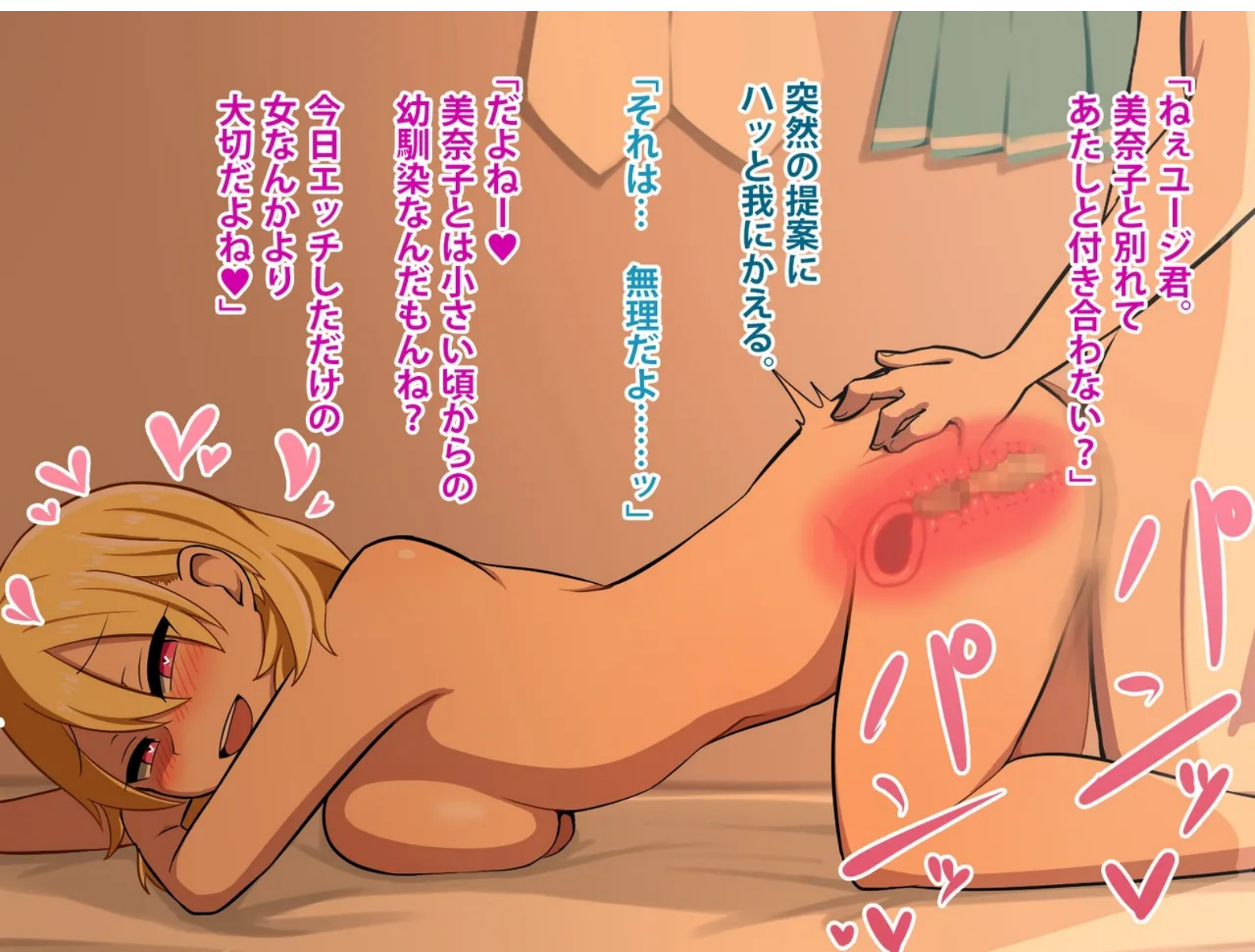
「ねえユージ君。
美奈子と別れて
あたしと付き合わない？」

突然の提案に
ハッと我にかえる。

「それは… 無理だよ……ッ」

「だよねー♥
美奈子とは小さい頃からの
幼馴染なんだもんね？」

今日エッチしただけの
女なんかより
大切だよね♥」



「でもさあ：
十数年一緒にいて
美奈子とできなかったこと、
今日だけでいっぱい
あたしとしちゃったよね?♡」

「キスもフェラもセックスも、
ぜーんぶあたしが初めてに
なっちゃった♡」

あたしで初めてを知っちゃったら、
美奈子とじゃもう満足
できないかもよ?♡」

そう言って、口角を
三日月のように歪めて笑う。



「身体の相性も
良いみたいだしさあ♡
ねえ?♡ ダメ?♡♡♡」

言い終えると、ふいに膣内が
キュツと締まった。

「うぐ…ツ!?!♡」

「もうイキそうだね♡
…あ、そうだ♡」



「もし美奈子と別れて
あたしと付き合ってくれるなら…
このまま中に出して♡♡」

そう悩むような提案ではない。
中に出しさえしなければいいだけだ。
選択権は僕が握っている。

「あたしが彼女だったら…
毎日エッチしてあげるん
だけどなあ…♡」

なのに何故だろう。
絶頂が近いというのに、
僕の腰は止まるそぶりを見せない。



「ああん!♥♥
ユージ君激しすぎ♥♥」

「ッ…ヤバ…ッ♥」

「いいよ♥♥
中にいっぱい出しちゃえ♥♥♥♥」

「も…う…ッ♥♥」

「ユージ君♥
イクときはなんて
言っただけ…?♥」

朦朧とした
意識の中で、
僕は無意識に
叫んでいた。

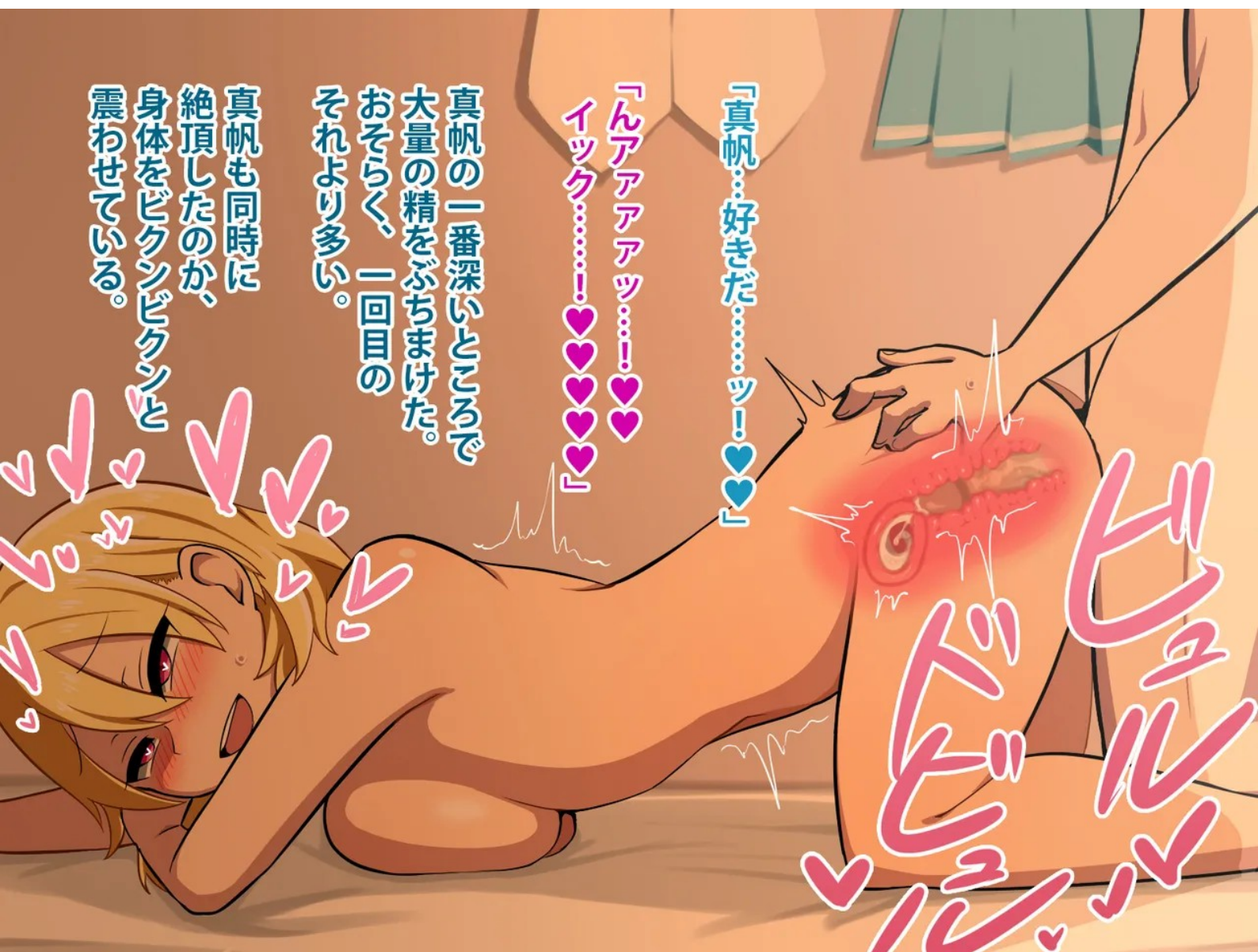


「真帆…好きだ…ツ!♡」

「んアアアツ…!♡♡♡♡♡
イック…!♡♡♡♡♡」

真帆の一番深いところで
大量の精をぶちまけた。
おそらく、一回目の
それより多い。

真帆も同時に
絶頂したのが、
身体をビクンビクンと
震わせている。

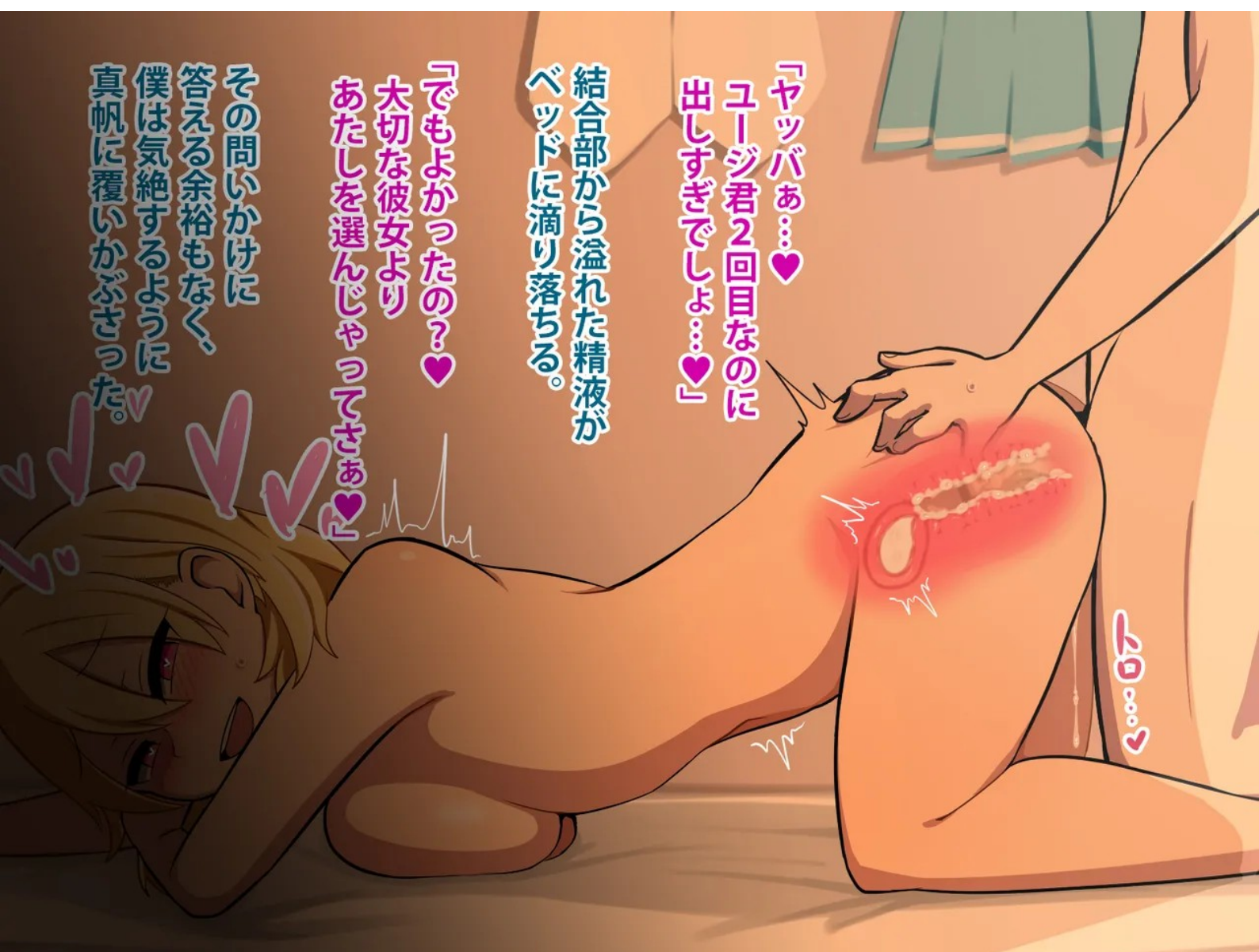


「ヤッバあ…♡
ユージ君2回目なのに
出しすぎでしょ…♡」

結合部から溢れた精液が
ベッドに滴り落ちる。

「でもよかったの？♡
大切な彼女より
あたしを選んじやってさあ♡」

その問いかけに
答える余裕もなく、
僕は気絶するように
真帆に覆いかぶさった。♡



どれほど眠っていただろう。

気が付くとすっかり日は沈んでおり、僕はベッドの上に横たわっていた。

頭がぼーっとしている。

なんだか悪い夢でも見ていたかのようだ。

そんなことを考えていると、耳元から声を掛けられる。

「あ、やっと起きた？」

暗闇の中で横に目をやると、大村さんが隣で横になっていた。

大村さんは静かにこちらを見据えていた。
その表情からは感情が読み取れない。

『そろそろ帰ったほうがいいよ。
親、帰ってくるから』

時間を確認すると、
すでに22時を回っていた。
この状況を親御さんに
見られるわけにはいかない。

急いで帰る支度をしたいところだが、
その前に大村さんに言うておかなければ
ならないことがある。



「大村さん、さっきの話なんだけど……」

「ああ、アレ冗談だから気にしなくていいよ」

こちらの発言を見透かしたかのように、
僕の言葉は遮られた。

「えっと、『アレ』っていうのは
大村さんと付き合ってた話のことかな？」

「うん。別にあたしユージ君と
付き合いたいわけじゃないし」



「じゃあ何であんなことを……」

「…美奈子さあ。ユージ君の話するときいつも嬉しそうなんだよね。見てるだけで伝わってくるよ。本当に好きなんだなあって」

「美奈子……」

愛する彼女の笑顔が頭に浮かび、罪悪感から胸が締め付けられる。

「そんな美奈子を見てたらさあ。こっと思うようになってきたんだよね」



「もしユージ君をあたしが奪っちゃったら
どんだけ気持ちいいんだろって♡」

「な…!」

どのようにして
その思考に至ったのか理解できない。

「大村さんと美奈子は
親友同士なんじゃなかったの…?
どうしてそんな…!」

「そうだよ?
だからこそ興奮するんじゃない♡
禁断の恋的なカンジで燃えるでしょ?」



「ほんっと…ツクツクして堪らなかった♡
だってユージ君、美奈子との絆より
あたしに中出しすることを優先したんだから♡」

そう言われると言葉が出なかった。
自分が選択できる状況で快楽を優先したのは
紛れもなく僕自身だからだ。

「たった1回のセックスで
美奈子と育んだ十数年を塗りつぶしたって
思うと…… 考えただけで濡れてくる♡」

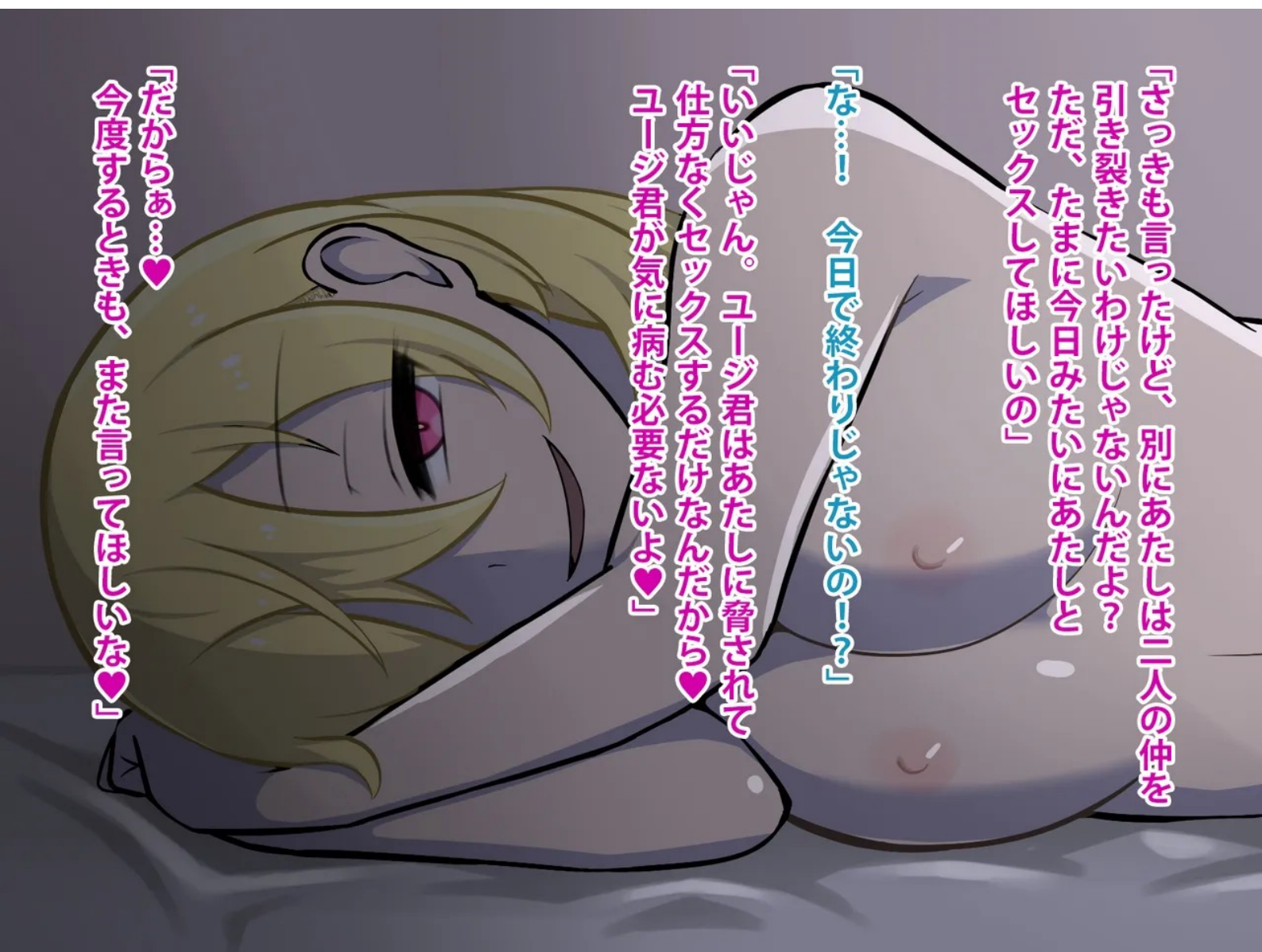


「さっきも言ったけど、別にあたしは二人の仲を
引き裂きたいわけじゃないんだよ？
ただ、たまに今日みたいにあたしと
セックスしてほしいの」

「な…！ 今日で終わりじゃないの!？」

「いいじゃん。ユージ君はあたしに脅されて
仕方なくセックスするだけなんだから♡
ユージ君が気に病む必要ないよ♡」

「だからあ…♡
今度するときも、また言ってほしいな♡」





「『真帆好きだ』って……♡」



僕のカノジョの素敵なトモダチ